

座長のまとめ(8~10)

佐藤素一(帝京大耳鼻科)

本年の研究会は、三宅浩郷教授主宰で東海大学医学部で行われ、同学の耳鼻咽喉科教室の諸先生のご努力とあいまって、整々と、しかも内容の充実したものであったことは参会者の一同感謝したところであった。

本会の演題は、本研究会の性質上、日常臨床に直結する興味ある報告が行われており、今回もそれがかなりの部分を占めていたことは喜ばしいことで、基礎的研究と並行して、**up-to-date** な演題が漸増してきたことは将来の発展を示唆していて、まことに欣ばしい。

8. 独協医大の内耳鼻科教室では、かねてから、ブロンカズマ・ベルナの臨床応用について諸方面から検討を加えてこれら多大の業績を挙げておられるが、今回は、これを慢性副鼻腔炎にウルトラソニックネブライザーをメディアとして用い、その効果を注射と比較して追及された独特な研究成果であった。

結論的に、「本剤を用いての **nebulization** は安全度の上で副作用は殆ど認められなかったし、有用性も皮下性に比し、遜色ないものであった」と報告された。

今後、さらにご努力をつみ重ねられ、確固たる内容に仕立て上げてもらいたい。

具体的に、エアロゾル発生装置としてジェット型とウルトラソニック型を使用した時のそれぞれの比較、これに伴い噴霧粒子の大小で効果に有意の差が生ずるかどうか、溶解液の種別と、濃淡の適正度、**adjuvant** として何かを附加して効果の増大を図られないか、さらに、実施回数の頻度、つまり8週間を更に延長したときの効果の増減など、今後大いに期待したい。

9. 大阪市大の中井耳鼻科教室では、さきの山本馨教授以来、気道病態の研究に特に注力され、いままで数多くの輝かしい足跡を遺されているが、今回は、商品名「リノピン」を用い **nebulization** を実施し、その臨床的有用性についての検討と、基礎的には鼻粘膜上皮細胞の繊毛運動機能とその形態変化について行った研究の報告であった。

「リノピン」及びこれとほぼ同成分の薬剤についてのエアロゾル療法に応用した報告は、本研究会では第4回目より登場し、毎回話題を提供している。

本研究では、「**nebulization** 週2回、8週間継続実施の症例に対する要約で、63.6%に効果が認められ、一方基礎的には鼻粘膜上皮細胞には、機能及び形態に対し障害を及ぼすことがなかった」と報告された。

前述したように、本剤及び同成分のものについての本研究会の対応は過去数回での報告にもとづいての検討から、おおよその使用量及び1クールをどの位の期間にするかのコンセンサスは既に形成されているけれども、アレルギー性鼻炎に対処する薬剤はエアロゾルとして用いるものだけでも他にいろいろとある。従って、会員としては、同疾患のうち、どういった型のものに、また同じ型のアレルギー性鼻炎でもどの **stadium** に用いるのが当を得ているか? また、同じような症例に他剤であって本疾患に有効とされているものと比較して、どの点で優れ、どの点を注意すべきか、さらに、二剤または三剤と併用した場合効果は倍増するのか、おのおの薬剤の使用優先順序など、ききたい、知りたい事項が多かったのではなかろうかと思つた。

さいわい、繊毛には悪影響を及ぼさないとということからも今後の研究追加に大いに期待したい。

10. 5箇所の病院チームが、インターナル点鼻液をジェット型ネブライザーでアレルギー性鼻炎に応用した成績を国立王子病院の椿医長が報告したものである。たまたま筆者が数年前ドイツを訪れたとき、スプレー式 **vernebler** を長期間に亘って患者に投与しつづけるのはどんなものであろうかという論議が起っていたこと

を想い出す。その同じ頃、アメリカでも喘息患者が喘息用吸入薬剤を手に握ったまま死亡した例がかなり起っていると報じられていた。われわれのところの通院患者でもしばしば、真面目に家庭での aerolization を実行しない例にぶつかる。つまり医師が患者に指示したとおりに施療が行われない訳で、その点、本報告のように「ドクターの目の前で」ということは、責任をもつ医師の治療方法としては最適であり、確実に治療効果を追いつけるデータとしては当然といえば当然のことであるが、時代のニーズに沿ってポケット型の携帯用のものが、いとも簡単に入手でき、一旦入手すると、医師の目のとどかぬところであいまいな方法がとられていることは何とも合点のいかないところでもある。本報告はこの真面目さとあいまいさを探るギャップを美事にクローズアップさせた。

しかし、この場合「医師の目の前で」というだけでなく、前処置または鼻処置が有効に作用していることもあって、結論づけるにはさらに多角的観察が必要になってくると思う。ただ、安直にポケット型スプレーを投薬すれば事足りるとする風潮には再考を促したに相違ない。

これからも、更に多くの臨床家が参加してそのネットを拡げていくことを期待したい。

本群は3題とも趣の異ったものであったが前述したように、直接日常診療に応用できる身近な情報を与えた貴重な発表であった。